国語科　中等二年生
単元名　「インタビューについて考えよう」

●授業計画（単元の流れ）

一次　1時　「良いインタビューとは何か」について考える。羽生善治氏に対するインタビュー動画と、そのインタビューのプロトコル資料を分析し、どのような工夫がされているのか考える。

二次　2時　グループ内での役割を決める。質問を各グループ二つずつ考える。質問が他のグループと重ならないように相談・調整して、グループ内でインタビューの練習をする。
※役割　第一質問者＝用意した質問を問いかける役割。
第二質問者＝インタビュイーの回答を受け、さらに投げ返すことで発展させていく役割。
記録＝インタビュー中のやりとりや、回答を記録する役割。

三次　3時　メディアセンターで司書の渡辺先生へのインタビューを1グループ5分で行う。

四次　4時　前時で行った各グループのインタビューを動画を見ながら振り返り、気付いたことをもとに、助言や、質問をする。

五次　5時　同上

六次　6時　インタビュー番組「サワコの朝」を視聴し、プロのインタビュアーの技術や工夫について考える。「より良いインタビューとは何か？」「インタビューで大切なこととは？」について、それぞれの考えを文章にまとめる。

インタビューを経験しよう

組　番（　　）

ユニットクエスチョン

より良いインタビューとは？

インタビューに関する用語

→インタビューイー【interviewee】　インタビューを受ける人。回答者。

→インタビュアー【interviewer】　インタビューをする人。質問者。

→アポイントメント　面会や会合の約束。

→プロトコル　発言記録。逐語録。発言を全て書き取った記録。

羽生善治氏に対するインタビューを分析する

●インタビュアーの質問および発言

①「勝負所で決断をどのようにされているんですか？決め事とかってあるんですか？」

②「日常から自分を信じられるように。」

③「そうすると、実際に決断をする時に大切になることというのは、日常から自信を積み重ねていくこと。」

④「感覚を大切にする。」

⑤「自分が大勝負を、対局をする中で、ま、羽生さんは、その、ご本の、『決断力』という本の中で、あえて自分自身が得意ではない戦法を使って、やることがあると。その中で、得られるものがあるということなんですけども。なんで、そういう風にされるんですか？」

メモ

羽生善治氏　「決断力」についてインタビュー記録

氏名（　　）

イ　**勝負所で決断をどのようにされているんですか？決め事とかってあるんですか？**

羽　やっぱり、あの～大事なのはですね。非常にまあ、こう～、自分自身を信じるっていうことは、一つあると思うんですよ。逆に言うと、それを信じられるかっていうのは、一番難しいところなんですよ。

　どうしてかっていうと、他の人のことは１００％は知らないわけですよ。だからある意味すごくこう、神格化してしまったりとか、信用してしまったりできるんですけど、自分自身のことはウソがつけないっていうか、こうやってる日常のことは全部もう知っているわけなんで、かえってそこで信用しろって言われると大体できないんですよ。いや、ホントに。だからそれは、結構ですね。如何にそれを信じることができるかっていうのはすごい大事な要素。だからそういう意味では日常が非常に大事と言えば大事なことだと思います。

イ　**日常から自分を信じられるように。**

羽　そうですね。だから、そういう風にしていれば、そういういざっていう決断するっていう場面になった時にあまり不安な気持ちにならなくて済む。

イ　**そうすると、実際に決断をする時に大切になることというのは、日常から自信を積み重ねていくこと。**

羽　そうですね。あとは、あの、もう一つはですね。あの～何て言うんでしょうかね。こう・・・やっぱり、感覚的なものとか、そういうのを結構、あの～何て言うんでしょうかね、研ぎ澄ませておくっていう感じですかね。今って特に知識っていうか、情報がいっぱいあるんで、どうしてもそれに流されやすいっていうか、そういう方向にどうしてもたくさんの時間を費やさざるを得ないので。そうではない、あの～、持っている、その、え～、能力っていうか、まあ、力と言うんでしょうかね。そういうのを、あの、こう、アンテナを張っておくというか、センサーを磨いておくというか、そういう感じはすごい大切だと思います。

イ　**感覚を大切にする。**

羽　うん、そうですね。つまり、何て言うか、そういう・・・大切にするんですけど、あの、え～と、どう言えばいいんでしょうかね。普通に暮らしてるとですね。結構、今、できなくなっちゃうんですよ。どうしても。

イ　**はい、そうですね。（↑あいづちとして）**

羽　それはあの、何ていうか、意識してそういう風にしてるっていう感じですね。

イ　**自分が大勝負を、対局をする中で、ま、羽生さんは、その、ご本の、『決断力』という本の中で、あえて自分自身が得意ではない戦法を使って、やることがあると。その中で、得られるものがあるということなんですけども。なんで、そういう風にされるんですか？**

羽　あ～、そうですね。あの～、ま、簡単に言うとですね。あの～、今、次の一局に勝つ最善の戦略は、長期的には最善ではないっていうことがあるんですよ。ええ、つまり手堅く良く知ってる形でやるっていうのは、この次の一局に勝つっていうためにはベストなんですけど。じゃあ、５年後とか１０年後のベストな選択かっていうと、そうではないっていうことなんで。だから、そのへんの、あの～、加減を知るためにそういうことをやっているっていう感じです。ええ。そのへんの加減をどれくらいまで飲み込む、どれくらいまでアクセルを踏み込めばいいのか、どれくらいまでリスクをとればいいのか、っていうのをやってみるっていうのと。

　あと、あの～ですね。実行してみなければ、行動してみなければ、やってみなければ学べないものってやっぱりあるんですよ。どんなに、あの、こう、いっぱい資料を集めて、いろいろ分析しても、やってみなきゃわからないとか、やってみないと学べないものとか吸収できないものって絶対あるんで。それが大きい舞台とか正に真剣勝負のところとか、実際にそれでどうなるかとか、あるいは本当にそれで、何ていうんでしょうかね。あの、怖い思いをしてとか、薄氷の上をこう歩くようなつもりでやっていく中でしか、学べないとか、吸収できないものっていうのはやっぱりあると思います。